

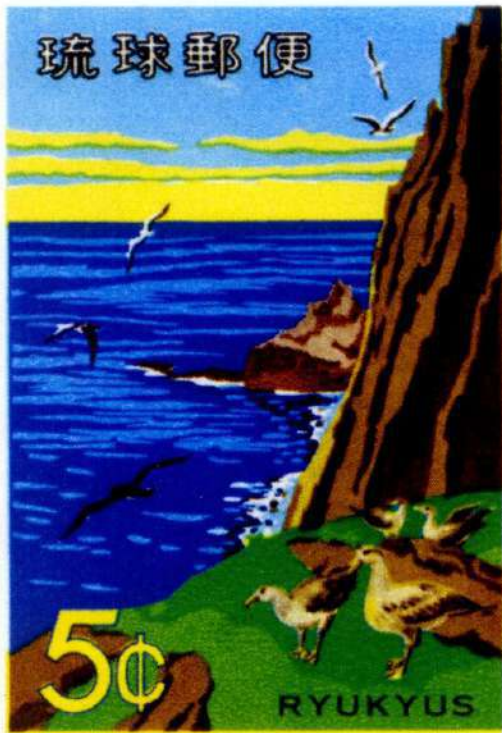
3、新聞雑誌に紹介されたもの

(1) 知られざる“尖閣切手”発行顛末記



2011年9月

琉球郵便



現在はクロアシアホウドリだけでなく、アホウドリも尖閣諸島の南・北小島で繁殖している。
(撮影・氷島邦夫/2002年)



*切手は左が原寸の250%、その他原寸。

沖縄切手「海洋シリーズ」第3集「海鳥」／第1集「夕陽と島」／第2集「サンゴ礁」

切手原画の参考になったアホウドリ



トピック 知られざる 沖縄切手発行裏ばなし “尖閣諸島切手”発行顛末記

近年、中国・台湾が領有権を主張している沖縄の尖閣諸島は、39年前の沖縄返還時、日本への返還が微妙な情勢下にありました。そんな当時、琉球郵政庁が極秘裏に“尖閣への想い”を託した、切手発行顛末記をご紹介します。

◆ 幻の鳥・アホウドリを描く切手

沖縄返還の約1ヵ月前、美しい沖縄の海を描いた「海洋シリーズ」(上)が、立て続けに発行されました。沖縄在住で、尖閣諸島の歴史を研究調査している國吉真古さんは、第3集の「海鳥」を見て、あることに気づきます。どこの島とも記述はないもの

の、その断崖の様子から、直感的に尖閣諸島とカツオドリを描いたのではないだろうか…と考えたのです。

ところが、切手の原画を担当した安次富長昭画伯に確認したところ、「いや、あれはアホウドリですよ」という驚くべき返答がありました。実は、この切手発行の前年、絶滅が危惧され、日本では鳥島(伊豆諸島)のみに生息するアホウドリが、尖閣諸島で確認されていたのです。沖縄の海にアホウドリならば、この島は尖閣諸島以外にはありえません。



切手原画作者
安次富 長昭(あしとみちょうしょう)



アホウドリの剥製制作者
友利 哲夫(ともりてつお)



琉球郵政庁郵券課長(当時)
浜元 暁男(はまもとあきお)



◀ 1971年の調査で、戦後をはじめて尖閣諸島の生息が確認されたクロアシアホウドリ。写真はそのとき発見・撮影されたつがい。観察者の眼の前で求愛ダンス。(撮影・新納義馬)

かつては、多くのアホウドリが生息していた尖閣諸島ですが、乱獲で数が減少し、1939年以降その姿はなくなります。しかし、1971年に琉球大学調査団が、クロアシアホウドリ(上)6羽の生息確認と、12羽のアホウドリ観察に成功していました。

◆ 剥製と写真をモデルに作画

琉球郵政庁は安次富氏へ、描く鳥は「アホウドリなり」と注文をつけます。しかし、珍鳥であるため、画伯も実物を見たことがありません。そこで、渡嘉敷真球前郵政庁長自らが、アトリエにアホウドリの剥製(左ページ)を届けにきました。

このアホウドリは、今も沖縄の本部町立博物館に保存されています。剥製を作ったのは、ヤンバルクイナの発見者で、鳥剥製作りの名人だった友利哲夫館長(元名護高校教諭)。これはワタリアホウドリといい、本来は日本にはいない種類。たまたま遠洋漁船の船員が捕獲したのですが、切手の参考モデルとなりました。

ただ、尖閣諸島で“生息”しているのはクロアシアホウドリ、翼を休めていたのはアホウドリです。そこで、琉大調査団から写真を借りたり詳し

い説明を受けて、青い海と険阻な断崖、そして、空を飛翔し岩場で戯れるアホウドリたちのイメージが完成したのだそうです。

◆ 琉球郵政人の心意気

さらに國吉さんは、当時の琉球郵政庁郵券課長・浜元暁男氏を訪ねます。浜元さんは、切手発行に伴う日米両政府のクレーム処理も担当していました。

琉球郵政最後の切手「切手趣味週間(嘉瓶)」に、“Final Issue”と世界に例のない付記をしたり、人気の切手発行数を増やすよう建言したりと、情熱家で剛胆だった浜元氏は、横やりさえ受けなければ大丈夫だと、首脳幹部のみの機密プロジェクトで発行を計画。第3集「海鳥」だけでなく、第1集「夕陽と島」でも、別の目論見を抱いていました。

原画写真を撮るならば、岩骨怪巖の魚釣島の雄姿が望ましい。海上に突き出た島影だけでは、どこの島かは判らない…と、原画技官を2週間の出張に出したのです。しかし、天候不順で尖閣諸島までたどり着か

コラム 国際紛争にまで発展することも…

領土をアピールする地図切手

ときに地図切手は、“自国の領土を主張する”という目的から、領土紛争の火種になる場合があります。過去には、ドミニカとハイチ、パラグアイとポリビアなどが、自国に有利な国境線の地図切手でさや当てを繰り返し、紛争に移行しています。

下は同じ形の地図切手ですが、アルゼンチンは「マルビナス諸島」、イギリスは「フォークランド諸島」と、自国の呼び名を冠しています。過去150年にわたり、領土の主権を争ってきた両国は、世界にPRする手段として地図切手を積極的に発行。そのプロパガンダ発行と、海底石油埋蔵の可能性や南極大陸領有権問題の緊張が頂点に達した1982年、フォークランド紛争が起こったのです。



◀ 独立時にスペイン植民地だった「マルビナス諸島」の主権を受け継いだ、と主張するアルゼンチンの切手(1964年)。



▶ 1952年、英国人探検家が「フォークランド諸島」と記録したことを、領有権の根拠としている英領切手(1933年)。

ず、やむなく第1集は「慶良間の海と島」が題材となりました。

沖縄返還を前に、日米両政府とも緊張状態だった当時。特に米政府は、当初の返還協定で尖閣諸島を含めることを渋ったこともあり、状況は非常に緊迫したものでした。

そこから、國吉さんは“当時の郵政人の尖閣にかける想い”を感じています。一般的な『海と海鳥と島』として巧みに企画を進め、琉球郵政庁が権限を持っている間に尖閣諸島を現した切手を発行することは、彼らの心意気であり悲願だったのではないだろうか…と。(文責・編集部)

南東側から見た南小島。急峻な断崖が印象的。(撮影・新納義馬/1979年)



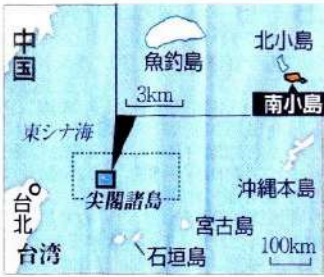
(2) 琉球政府が尖閣切手

読賣新聞 2012年5月12日

琉球政府が尖閣切手

沖繩40年の軌跡

沖繩の本土復帰直前の1972年4月、当時の琉球政府郵政庁が、切り立った断崖と海鳥が舞う姿を描いた「琉球切手」を発行した。凶柄の場所は記されず、長年の謎だったが、尖閣諸島（沖縄県石垣市）を研究する国吉真古さん（67）（那覇市）が調べた結果、尖閣諸島と判明。中国、台湾が領有権を主張し始めた時期だったが、当時の郵券課長は「尖閣諸島の姿を切手に残したかった」と証言したという。復帰40年を機に、切手を保管する石垣市立八重山博物館は、観覧希望者には申請を受けたうえで公開する。（吉村隆平）



領有権問題が影響？ 場所記さず

那覇の男性調査 南小島描く



琉球政府が発行した切手「海鳥と海と島」。尖閣諸島・南小島の岩棚でアホウドリが戯れている

同行は、米国統治下で独自に切手を発行。72年3月からは、沖縄の海をテーマにした「海洋シリーズ」を第3集まで出した。国吉さんは以前、シリーズが掲載されたカタログを見ていた際、第3集「海鳥と海と島」（72年4月14日発行）に描かれた断崖が、71年、琉球大調査団によ

尖閣の島影と似ていることに気づいた。「領有権問題に配慮して、場所を秘して発行したのでは」。関係者に聞き取りを始めた。

切手の原画を担当した琉球大名誉教授・安次富長昭さん（81）も「モデルは尖閣諸島・南小島だ」と認めた。



尖閣諸島の南小島（昨年6月、本社機から）切手の原画を描いた安次富さん（那覇市内で）

り、国指定特別天然記念物のアホウドリが尖閣諸島で生息していることを確認。国内では、伊豆諸島・鳥島（東京都）に続く生息場所と分かり、沖縄中が沸いていた。

安次富さんによると、琉球政府から「アホウドリを描いてほしい」と依頼を受けたが、本物を見たことがなかったため、政府に保管されていた別の種類のアホウドリの剥製をアトリエに運び込んだ。また、調査団メンバーの新納義馬琉球大名誉教授から尖閣諸島の情景を聞き取り、岩陰に暮らす鳥の姿を描いた。

尖閣諸島を巡っては68年、周辺の大陸棚に石油資源が埋蔵されていることが判明し、71年に中台が公式に領有権を主張。当時の外交文書には、米国が台湾から圧力をかけられたことを示す記載があった。

国吉さんは「現政府の尖閣への対応は期待外れ。当時の職員は領土に対する強い思いがあったはずだ。多くの人々に認識を深めてほしい」と話す。

国吉さんが事務局長を務める「尖閣諸島文献資料編纂会」は2007年に発行した資料集「尖閣研究」に秘話を紹介し、会のホームページで切手も公開している。問い合わせは同博物館（0980・82・47112）へ。